

最初期記憶の発現年齢と特徴： 日本人女子大学生における調査

森 津太子

Age and Characteristics of Adults' Earliest Memories in Japanese Female University Students

MORI Tsutako

Abstract : Recent research on the phenomenon of infantile amnesia has focused on cultural differences in the characteristics of adults' earliest memories. Although such research provides new insights into infantile amnesia, little research has been conducted in Japan; therefore, comparable Japanese data was rather scarce. The purpose of this study is to show the characteristics of the earliest memories of Japanese adolescents. One hundred twenty-nine Japanese female university students provided their earliest memories, which were analyzed in detail in light of age and content (places, people, events, valences, five senses, and affects). In general, their earliest memories were similar to those of Europeans in both age and contents. Implications of this study for future research are discussed.

Key Words : Infantile amnesia, Earliest memory, Cultural difference

自分自身の記憶を遡った場合、ほとんどの人はある時期（通常、3、4歳）を境に、それ以前のことを想起できない。これを幼児期健忘と言う。記憶はもともと時間の経過とともに減衰するものである。しかし、同じ15年前のことを思い出すにしても、40歳の方が25歳のことを思い出すのは比較的容易であるのに対し、17歳の青年が2歳のことを思い出すことは困難であることから（佐藤、2001）、幼児期健忘は、単純な記憶の減衰によるものではないと考えられている。

このような不可解な記憶の不連続性が生じる理由については、これまで数多くの説明が試みられてきた。この現象を最初に指摘した Freud (1905/1953) は、幼児期健忘は、乳幼児期に経験したトラウマを意識の届かない場所に抑圧した結果だとしたが、この説明はその後、否定されている。しかし、近年になっても、幼児期健忘のメカニズムを解き明かす決定的な証拠は提出されておらず、幼児期健忘の研究は停滞したままになっている（森、2003；Pillemer & White, 1989）。こうしたなか、最近、比較文化的な研究が行われるよう

になった。従来の研究のほとんどは、欧米で行われたもので、欧米人が想起する一番初めの記憶（以下、最初期記憶と呼ぶ）の特徴から、幼児期健忘のメカニズムが推測されてきた。しかし、例えば最初期記憶の年齢（すなわち、幼児期健忘の終結年齢）といった単純な特徴においても、欧米とそれ以外の地域では異なることがいくつかの研究によって示されるようになってきた。もし、幼児期健忘という現象が文化によって異なる特徴を持つのなら、それまで欧米の研究者が“人類に普遍的な”メカニズムと考えてきたものは、根底から覆されることになる。

最初期記憶が文化によって異なることを最初に明確に示したのは、Mullen (1994) である。彼女は、アジア人と白人の大学生に幼年期の記憶を尋ね、その結果、アジア人は白人よりも想起される記憶が有意に遅いことを報告している。また、MacDonald, Uesiliana, and Hayne (2000) は、欧米人、マオリ人、アジア人を比較し、やはりアジア人は欧米人より想起される記憶の経験年齢が遅いこと、一方マオリ人は、アジア

人、欧米人より早い時期の記憶を想起することを示している。さらに Wang (2001) は、アメリカ人と中国人の最初期記憶を、想起年齢だけでなく、さまざまな側面から比較し、比較文化研究こそが、停滞した幼児期健忘研究の突破口になるとしている (Wang, 2003)。

しかしこうした状況のなか、日本では、最初期記憶の研究はほとんどされてこなかった (数少ない例外として、藤永 (1992, 1993, 1994, 1995) の一連の研究がある)。先に挙げた欧米人とアジア人が対比された研究においても、そこでアジア人として取り上げられているのは、ほとんどが中国人もしくは欧米で学ぶアジア人留学生であるため、一般的な日本人の最初期記憶がどういう特徴を持つのかははっきりしていない。そこで本研究は、日本人大学生女子 129 名の最初期記憶を収集し、その発現年齢と内容を詳細に調べることで、日本人の最初期記憶の特徴を示す資料を提出することを目的とした。内容の検討にあたっては、従来、検討されてこなかった最初期記憶の登場人物や場所にも注目した。これは、記憶は、個人内で形成されるものではなく、周辺の人や状況との相互作用によって、社会的に形成されるという近年の知見に基づいたものである。また、想起された記憶の経験年齢による内容の相違も検討し、子どもの発達の变化やそれに伴う環境の変化が、記憶内容にどのような影響を及ぼしているかも調べた。

方 法

調査対象者：129名の大学生女子

手続き：調査対象者に対し、最初のものと思われる記憶を想起し、それを詳細に記述して、後日提出するように求めた。これまでの研究には、大学の実験室や教室といった場所で、記憶を想起させるものが多いが、非日常的な場所での記憶想起は、適切な想起を促せないという指摘もある (Pillemer, 1998)。そこで今回は、なるべく本人がリラックスをした状態で、時間をかけて記憶を想起できるよう、こうした手続きをとることにした。記述の際には、まずその出来事を経験した推定年齢、場所、記憶の中に登場する人物を箇条書きし、その後、記憶の内容を 800 字程度で説明するように教示した。

コード化：調査対象者の記述を 2 名の評定者が独立に読み、推定年齢と以下の 6 つの側面の記憶内容をコー

ド化した。2 人の評定が一致しなかった箇所は、筆者が 3 人目の評定者として判断し、いずれかに分類した。

I. 推定年齢

調査対象者の「推定年齢」についての記述から、想起した記憶の経験年齢を、0) 0 歳以上 1 歳未満, 1) 1 歳以上 2 歳未満, 2) 2 歳以上 3 歳未満, 3) 3 歳以上 4 歳未満, 4) 4 歳以上 5 歳未満, 5) 5 歳以上 6 歳未満, 6) 6 歳以上 7 歳未満, 7) 7 歳以上 8 歳未満, 8) 8 歳以上 9 歳未満, 9) 9 歳以上, のいずれかに分類した。

II. 記憶内容

a. 経験した場所 (単一選択) 調査対象者の「場所」についての記述から、想起した記憶の経験場所を、1) 自宅 (以前に住んでいた家を含む), 2) 祖父母などの親戚の家, 3) 保育園・幼稚園・小学校, 4) その他, のいずれかに分類した。複数の場所が記述されていた場合には、想起された記憶エピソードの中で、最も中心的な場所を選んだ。

b. 登場人物 (複数選択) 調査対象者の「登場人物」についての記述をもとに、記憶の中に、1) 母, 2) 父, 3) 兄姉, 4) 弟妹, 5) 祖父母, 6) 祖父母以外の親戚 (おとな), 7) 保育園・幼稚園・小学校の先生, 8) 同年代の友達 (いとこ, 近所の友達を含む), 9) それ以外の人物, がそれぞれ登場するかをチェックした。調査対象者が「登場人物」として列挙していない人物であっても、記憶内容の説明で言及されていた人物は、登場人物に含めた。

c. 出来事 (複数選択) Waldfoegel (1948) の研究で、よく想起されたものとして挙げられた項目を用いて、記憶内容を分類した (表 3 参照)。複数の経験が混在する記憶については、該当する内容をすべてチェックした。

d. 感情価 (単一選択) 想起された記憶内容の全般的な感情価を、1) ネガティブ, 2) ポジティブ, 3) ニュートラル, 4) ネガティブなもの、ポジティブなものが混在, のいずれかに分類した。

e. 感情 (複数選択) 記憶内容の中に含まれる感情を、より原初的な感情である 1) 喜び, 2) 悲しみ, 3) 怒り, 4) 不安・恐れと、より高次の感情である 5) 当惑・恥ずかしさ, 6) 罪悪感・うしろめたさ, の 6 つの側面から判断し、含まれると考えられる感情をすべてチェックした。

f. 五感 (複数選択) 1) 視覚を色, 風景など, 目から入ってくる刺激, 2) 聴覚を音, 会話など, 耳から入ってくる刺激, 3) 嗅覚をにおいなど, 鼻から入ってくる刺激, 4) 味覚を味など, 口・舌から入ってくる刺激, 5) 触覚を手ざわりなど, 皮膚から入ってくる刺激とし, 記憶内容の中に含まれている五感をすべてチェックした。

結果と考察

I. 推定年齢

想起された記憶の推定年齢は, 3-4歳が56例と最も多く, 全体の43.41%を占めており, 次いで4-5歳が27例(20.93%), 2-3歳が19例(14.73%)となっていた(図1)。9歳以上の記憶はなかった。先行研究の多くは, 「何歳何ヶ月」の単位まで経験年齢を推定させ, その平均値を最初期記憶の年齢としている。しかし, 多くの調査対象者にとって, 何ヶ月の単位まで想起するのは難しく, 必然的に「3歳くらい」といった曖昧な回答が多くなる。そうした場合, これまでの研究では「一律に3歳6ヶ月とする」などの措置を施した上で平均値を計算するのが一般的であったが, そのようにして算出された値が意味のあるものかは疑わしい。本研究の場合も, 調査対象者のほとんどは「何歳」の単位までを答えるのがやっとで, 対象者によっては年齢を特定することすら難しかった。そこで今回は, 経験年齢の平均値を算出することはやめ, 1歳単位で記憶を分類するにとどめた。

上記のような事情のため, 過去の研究と厳密に年齢を比較することはできないが, 今回の結果は, これまでに欧米で報告された結果と相違するものではなく, むしろよく似た結果だと言える。アジア人と欧米人の

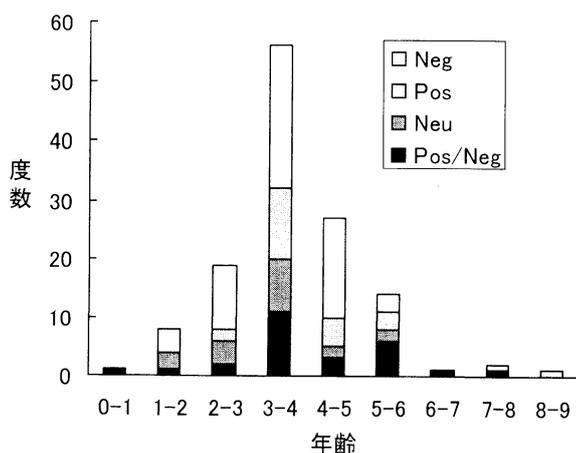


図1 年齢と感情価

最初期記憶を比較した研究の中には, アジア人の最初期記憶の平均年齢として, 4歳以上を報告したものもあり, 例えば Mullen (1994) の研究4では55.5ヶ月, MacDonald et al. (2000) の研究では57.84ヶ月と報告されている。また, 従来の研究の大多数が, 女性は男性に比べ最初期記憶の年齢が低いとされる中, MacDonald et al. の研究では, アジア人女性の最初期記憶は男性のものより遅く, 平均73.3ヶ月と報告されている。しかし, 本調査の対象者の半数近くは3-4歳の記憶が最も初期のものであり, そうした研究の結果を追認するものではなかった。

II. 記憶内容

次に, 記憶内容の結果を報告する。ここでは, 全般的な特徴に加え, 想起された出来事の実験年齢によって, 内容が異なるかについても検討した。こうした年齢差の検討にあたっては, 記憶が最も想起された「3歳以上4歳未満」を平均的な年齢と考え, その前後で, 調査対象者を3群(0-3歳, 3-4歳, 4-9歳)に分けることで, 各々の特徴を比較した。

a. 場所(表1) 想起された記憶内容を体験した場所は, 「その他」を除くと, 「保育園・幼稚園・小学校」が全体としては一番多く, 次いで「自宅」が多かった。ただし, これは年齢によって大きく差があり, 0-3歳では「自宅」や「親戚の家」が多い。一方, 4-9歳になると, 「自宅」や「親戚の家」が減る反面, 「保育園・幼稚園・小学校」が急激に増えており, 記憶内容が, 子どもの生活空間や活動範囲の変化に伴って, 変わってきていることがわかる。

b. 登場人物(表2) 記憶に登場する人物は, 「母親」が圧倒的に多く, 次いで, 「同年代の友だち」, 「父親」, 「保育園・幼稚園・小学校などの先生」という順であった。場所の場合と同様に, 登場人物の場合も, 経験年齢による違いが見られ, 年が上がるにつれ, 父親, 兄弟, 祖父母, 親戚が減る一方, 先生や友だちといった家族以外の人物が登場するケースが増えていることがわかる。特に, 友だちは4-9歳では, 母親と同程度以上に記憶に登場する人物であり, この年齢の子どもの生活において, 友だちが非常に大きな

表1 場所 (%)

	自宅	親戚の家	保育園等	その他	人数
全体	13.18	9.30	27.91	49.61	129
0~3歳	17.86	17.86	7.14	57.14	28
3~4歳	17.86	8.93	25.00	48.21	56
4~9歳	4.44	4.44	44.44	46.67	45

表2 登場人物 (%)

	母	父	兄姉	弟妹	祖父母	親戚	先生	友だち	その他
全体	72.09	34.11	15.50	13.95	19.38	11.63	27.13	44.96	32.56
0~3歳	75.00	42.86	21.43	3.57	28.57	21.43	7.14	28.57	28.57
3~4歳	78.57	39.29	17.86	17.86	19.64	8.93	21.43	37.50	32.14
4~9歳	62.22	22.22	8.89	15.56	13.33	8.89	46.67	64.44	35.56

表3 出来事の内容

	度数	割合
A. 個人的な経験, 感情, 態度などの記憶		
1. 成功, 達成	10	7.75
2. 失敗, 欲求不満, 剥奪	18	13.95
3. 恐れ, 心配, 罪の意識	51	39.53
4. 当惑, 屈辱	16	12.40
5. 畏怖, 驚き, 好奇心, 混乱	27	20.93
6. 性的感情, 性愛的な愛着	0	0.00
7. お気に入りの持ち物: おもちゃ, ペット, 衣服など	11	8.53
8. けが, 病気	26	20.16
9. 夢, 悪夢	1	0.78
B. 家族(親類を含む)に関連した記憶		
1. 家族の成員に対する感情, 態度	27	20.93
2. 家族の習慣, 活動	0	0.00
3. 家族の葛藤: 両親, 兄弟姉妹	3	2.33
4. 弟妹の誕生	6	4.65
5. 親のしつけ, 罰	2	1.55
6. 家族成員の病気, けが, 死	6	4.65
C. 近所の人々に関連した記憶		
1. 友達, 近所の人	6	4.65
2. 近所の人との遊び, 活動	8	6.20
3. 口論, けんか	1	0.78
4. 興奮する出来事: 事件, 火事, 醜聞など	0	0.00
5. 新しい地域への引っ越し	1	0.78
D. 学校に関連する出来事		
1. 先生	17	13.18
2. クラスメート	6	4.65
3. 活動: 遊び, 授業, スポーツ, お祭りなど	20	15.50
4. 好きな科目	0	0.00
5. 叱られた出来事	4	3.10
6. 当惑する出来事	1	0.78
7. 昇進と失敗	0	0.00
E. リクリエーション活動に関連する記憶		
1. 旅, 休暇	11	8.53
2. パーティー, 休日(プレゼントをもらうことを含む)	3	2.33
3. ピクニック, 遠足	3	2.33
4. 家族や親戚の家への訪問(訪問される場合も含む)	5	3.88
5. ショー, サーカス, お祭り	2	1.55
6. 特別なもてなし	2	1.55

役割を果たしていることがわかる。なお、登場人物が一人もいない記憶(当人しか登場しない記憶)を想起した者が2名おり、0-1歳の記憶を想起した者と1-2歳の記憶を想起した者であった。

c. 出来事の内容(表3) Waldfoegel (1948) の分類のうち、「A. 個人的な経験, 感情, 態度などの記憶」の「3. 恐れ, 不安, 罪の意識」に触れた内容が一番

表4 感情価 (%)

	Negative	Positive	Neutral	Pos/Neg
全体	46.51	17.83	15.50	20.16
0~3歳	53.57	7.14	25.00	14.29
3~4歳	42.86	21.43	16.07	19.64
4~9歳	46.67	20.00	8.89	24.44

多く、その他には、「5. 畏怖, 驚き, 好奇心, 混乱」に含まれる内容や、「8. けが, 病気」に関する内容も多かった。また、「B. 家族(親類を含む)に関連した記憶」の中の「1. 家族成員に対する感情, 態度」に対応する内容も多かった。なお、個別のトピックスとしては、けがに関するものが圧倒的に多かったが、祖父母などのお葬式, 迷子, 様々な理由による母子分離や孤立の状況の記憶(例: 登園, お留守番, 弟妹誕生によって一時的に祖父母などに預けられたこと)も複数見られた。

d. 感情価(図1, 表4) 全体として「ネガティブ」と判断出来る内容が半数近くを占め, 残りを「ポジティブ」, 「ニュートラル」, 「ポジティブ・ネガティブが混在した内容」がほぼ等分した。想起される出来事がポジティブなものが優勢か, ネガティブなものが優勢かという点については, これまでのところ, 研究によって結果が分かっている。例えば, Waldfoegel (1948) は, ポジティブ事象の再生が全体の約50%を占め, ネガティブ事象は約30%, ニュートラル記憶は約20%であったと報告している(同様に, ポジティブな記憶が優勢であった研究としては, Kihlstrom and Harackiewicz (1982) などがある)。一方, Howes, Siegel, and Brown (1993) は, 全体の55%にネガティブな感情が, 19%にポジティブな感情が含まれているとしている(同様に, ネガティブな記憶が優勢だった研究としては, Dudycha and Dudycha (1933) などがある)。

出来事の感情価には年齢による相違も見られた。ネガティブな内容の記憶は, どの年齢でももっとも多いが, ポジティブな内容は0-3歳で少なく, 年齢があがると増えてくる。反対に, ニュートラルな記憶は, 0-3歳で多いのに対し, 年齢があがると減る傾向にあ

表5 五感 (%)

	視覚	聴覚	嗅覚	味覚	触覚
全体	100.00	49.61	2.33	2.33	24.03
0~3 歳	100.00	50.00	3.57	3.57	28.57
3~4 歳	100.00	46.43	1.79	1.79	21.43
4~9 歳	100.00	53.33	2.22	2.22	24.44

表6 感情 (%)

	喜び	悲しみ	怒り	不安	当惑	罪悪感
全体	31.78	21.71	6.98	41.09	17.83	8.53
0~3 歳	10.71	17.86	10.71	42.86	7.14	7.14
3~4 歳	33.93	21.43	1.79	42.86	16.07	3.57
4~9 歳	42.22	24.44	11.11	37.78	26.67	15.56

る。また、4-9 歳では、ポジティブとネガティブが混在した記憶が、ネガティブな記憶に続いて多くなっており、記憶内容が複雑になっていることがうかがえる。

e. 感情 (表5) 記憶の中で経験された感情は、「不安・恐れ」が最も多く、「喜び」、「悲しみ」、「当惑・恥ずかしさ」と続いた。年齢による変化を見ると、年齢が上がるにつれ、0-3 歳ではあまり見られなかった「喜び」の感情が急激に増えている。これは、「感情価」の項で述べた年齢上昇によるポジティブな記憶の増加と連動するものである。また、「当惑・恥ずかしさ」、「罪悪感・うしろめたさ」といった高次の感情も年齢に伴って増えており、発達に伴い、感情が複雑化している様子が見られる。

f. 五感 (表6) 風景・色など「視覚」刺激に関連した描写は、すべての記憶内容に見られ、視覚を伴わない記憶は皆無であった。会話・音など「聴覚」刺激に関連する描写は半数程度、痛み・手触りなど肌から入ってくる「触覚」刺激は1/4程度見られた。それに対して、臭いなどの「嗅覚」刺激や、味などの「味覚」刺激に関する描写はわずかしかなかった。また、こうした傾向は、年齢によってほとんど相違が見られなかった。

最初期記憶に見られる五感を検討したものには、Kihlstrom and Harackiewicz (1982) があるが、そこでは、調査対象者自身が記憶イメージの中に含まれる感覚モダリティを選択している。方法は異なるものの結果の傾向はよく似ており、彼らの研究でも、視覚情報はほぼすべての記憶に含まれ、次いで聴覚情報と触覚情報が多かった。また、嗅覚情報と味覚情報は、やはり他の五感に比べて少なくなかった。

ま と め

本研究で見られた最初期記憶の特徴は、発現年齢についても、個々の記憶の内容についても、これまで欧米で報告されてきたものと概ね同じであった。特に最初期記憶の年齢は、これまでの研究でアジア人は遅い傾向があることが報告されているが、今回の調査では3-4 歳の最初期記憶が半数近くを占め、欧米の研究と際立った違いは見られなかった。ただし、これらの結果は、直接、文化比較を行って得られたものではなく、またサンプルも女子大学生という限られたものであったため、結果の解釈には注意が必要である。

本研究では、想起された記憶の経験年齢による特徴の差も検討した。出来事を経験した場所、登場する人物、感情など、多くの特徴で年齢に伴う変化が見られ、活動範囲の変化や、認知的、社会的発達を反映していると考えられた。最初期記憶の研究において、こうした年齢差を比較・検討したものは、多くない。最初期記憶の内容を検討する研究としては、これまで性差と文化差が主に検討されてきたが、今後、年齢差についても、より詳細に比較していくことで、幼児期健忘のメカニズム解明に示唆が得られるかもしれない。また、近年、最初期記憶の文化差が主張される背景には、文化による価値観の相違（例えば、個人主義か集団主義か）が、記憶の形成に関わるという考えがある。もし、価値観によって最初期記憶が相違するのであれば、時代的な変化もあるはずであり、今後は、そうした検討も必要だろう。いずれにせよ、多面的なアプローチを続けていくことで、すでに100年近くも解決していない幼児期健忘のメカニズムが、少しずつ明らかになっていくことであろう。

引用文献

- Dudyca, G. J. & Dudyca, M. M. (1933). Some factors and characteristics of childhood memories. *Child Development*, **4**, 265-278.
- Freud, S. (1953). Three essays on the theory of sexuality. In J. Strachey (Ed.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud* (vol. 7, pp. 135-243), London: Hogarth Press. (原著出版 1905 年)
- 藤永 保 (1992). 初期記憶の研究 (1): 年齢による特徴の推移, 発達研究, **8**, 27-38.
- 藤永 保 (1993). 初期記憶の研究 (2): 記憶心象と自己対象化, 発達研究, **9**, 1-12.
- 藤永 保 (1994). 初期記憶の研究 (3): 性差について, 発達研究, **10**, 1-5.

- 藤永 保 (1995). 初期記憶の研究 (4): 性差について (続), 発達研究, **11**, 1-9.
- Howes, M., Siegel, M. & Brown, F. (1993). Early childhood memories: Accuracy and affect. *Cognition*, **47**, 95-119.
- Kihlstrom, J. F., & Harackiewicz, J. M. (1982). The earliest recollection: A new survey. *Journal of Personality*, **50**, 134-148.
- MacDonald, S., Uesiliana, K., & Hayne, H. (2000). Cross-cultural and gender differences in childhood amnesia. *Memory*, **8**, 365-376.
- 森 津太子 (2003). 幼児期健忘と最初期記憶に関する研究の現在 甲南女子大学研究紀要 (人間科学編), **39**, 19-25.
- Mullen, M. K. (1994). Earliest recollections of childhood: A demographic analysis. *Cognition*, **52**, 55-79.
- Pillemer, D. B. (1998). What is remembered about early childhood events? *Clinical Psychology Review*, **18**, 895-913.
- Pillemer, D. B., & White, S. H. (1989). Childhood events recalled by children and adults. *Advances in child development and behavior*, **21**, 297-340.
- 佐藤 浩一 (2001). 自伝的記憶 森 敏昭 (編著)・21世紀の認知心理学を創る会 (著), 認知心理学を語る (1): おもしろ記憶のラボラトリー (pp. 15-36). 北大路書房
- Waldfogel, S. (1948). The frequency and affective character of childhood memories. *Psychological Monographs*, **62**, Whole No. 291.
- Wang, Q. (2001). Culture effects on adults' earliest childhood recollection and self-description: Implications for the relation between memory and self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 220-233.
- Wang, Q. (2003). Infantile amnesia reconsidered: A cross-cultural analysis. *Memory*, **11**, 65-80.